

## 役割語としての「僕」「あたし」

— 村上春樹の翻訳から —

斎藤 理香

日本語の一人称代名詞は「僕」「あたし」「私」「おれ」「わし」など複数あるが、それらは、たとえば「僕」と常に自称する人物は比較的若くそれほど高い社会的立場にない男性、「あたし」はくだけた話し方をする若い女性、「わし」は高齢の男性、などと文学作品において登場人物の属性や性格を典型的に表すのに便利に使われることがある。これらは、フィクションにおける特定の人物像の発する言葉遣いが、その人物像にふさわしい話し方の特徴を示している（金水 2003：205）というのに該当し、その意味で「役割語」の一種といえる。本発表では、村上春樹の翻訳作品中の役割語「僕」と「あたし」に焦点を当て、それらが典型的な“役割語的役割”を果たしつつ、そのような役割とは異なる意味や効果を持つことについて考察した。

まず村上春樹の翻訳作品における「僕」についてだが、作品中の語り手である「僕」と、他の登場人物によって使われる「僕」とは切り分けた。言うまでもないことだが、英語ではほぼ“I”のみに限られる一人称代名詞を日本語へ翻訳する場合は、「僕」なのか「私」なのかは翻訳者に委ねられることになる。村上の翻訳作品中の語り手が「僕」であることを検討する際は、彼が1979年に作家デビューしてからしばらくの間は、小説の語り手の一人称が常に「私」ではなく「僕」であった（たとえば Rubin 2002）ことにも注目する必要がある。また、その選択は作家自身にはほとんど無自覚であったともいわれている。村上自身は「すべてはテキストが規定するし、……「私」でも「僕」でも、僕自身はどちらでもいいんです」（村上・柴田 2002：53）と語ってはいるが、この引用文（彼の翻訳協力者・柴田元幸との対談の採録）の中でも「僕自身」と言っているように、村上は創作以外の文章でも「僕」と自

称している。このことから、「僕」は作家・村上のアイデンティティーと切り離せないのではないかと想像される。

そのことを念頭に彼の翻訳作品を見ると、たとえば『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(村上訳 2006)では、主人公で語り手のホールデンは、おそらく男子高校生という理由で「僕」と訳されているが、さらに細部を見ていくと、ホールデンの独り言で感嘆詞の“Boy!”や“God”“Jesus”などが「やれやれ」と訳されている。「やれやれ」は、村上の小説の登場人物のセリフや彼のエッセー等でしばしば目にされるため、彼の熱心な読者にとってはいかにも村上らしい翻訳ということになるのだが、ここには作品の外にいる作者(翻訳者)「僕」が、主人公で語り手の「僕」に同化するように作品内に介入するという意味で「メタフィクション」(佐々木 2014: 30-31)的要素が見受けられる。

次に、登場人物のセリフ内の一人称「僕」は、男子高校生の登場人物でかつ語り手であるホールデンの例のように、概ね年若い男性を表す役割語として機能しているが、『グレート・ギャツビー』(村上訳 2006)では、トムという登場人物が相手や場面によって「僕」と「おれ」を巧みに使い分けて上流階級というステイタスを誇示しつつ傲慢な性格をも露呈させるように訳出されている(斎藤 2024: 21-23)。これは、「僕」と「おれ」双方の一人称代名詞の役割語性が一人の人物の内面的な多面性を表現することに一役買っているということであり、役割語が典型的キャラクターを同一作品の中で一貫して構築するのとは異なる効果を生み出している。

村上の翻訳作品中の「あたし」は、「僕」とは違いメタフィクション的要素は含まないが、登場人物のキャラクター設定において多様な使われ方をしている。『グレート・ギャツビー』のセリフ中の「あたし」は、一つには女性キャラクターにおいて「私」との対比を表すのに使われている。典型例として、トムの愛人で労働者階級出身の女性マートルは常に「あたし」だが、彼の妻で上流階級出身の女性デイジーは「私」と自称する。「私」はしかし、一般的に男女を問わず使われる一人称代名詞なので、ともに女性ジェンダーを表しながら階級差を浮き彫りにする「あたし」と「私」は、対比的に用いられた場合には女性一人称としての役割語性を発揮する例になる。

「あたし」はまた、特異な男性キャラクターを表す一人称でもある。『グレー

ト・ギャツビー』で、妻のマートルに浮気され、うだつのあがらない車の修理工ウィルソンが、上客のトムに対して卑屈さを滲ませながら「あたし」という自称詞を使っている。また、語り手「僕」に対して、ギャツビーを貧乏のどん底から引き上げたのは自分なのだと言豪語する元ビジネス・パートナーの男が、それに『ティファニーで朝食を』(村上訳 2008)で、やはり語り手「僕」に女性の中心キャラクター・ホリーの才能に目をつけスカウトしたのは自分であると滔々と語る俳優エージェントの男の一人称が「あたし」となっている。「あたし」と自称する男性キャラクターには、どこか胡散臭さが漂っており、女性キャラクターが使う「あたし」とは異なる役割語性が見出せる。

以上のように、村上の翻訳文における役割語「僕」「あたし」は、登場人物の一貫した特性を示すという典型的な役割語の役割を超え、キャラクターの特異性、場面や状況に応じて変化し得る心理状態などを表現する効果をもたらしている点が特徴的だと言える。

### 【参考文献】

- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店。  
斎藤理香 (2024) 「村上春樹の翻訳文体とジェンダー表現——変幻自在の僕・私・あたし——」『日本とジェンダー』第22号、pp. 1-31、日本語ジェンダー学会。  
佐々木敦 (2014) 『あなたは今この文章を読んでいる』慶応義塾大学出版会。  
村上春樹・柴田元幸 (2000) 『翻訳夜話』文芸春秋。  
JD サリンジャー、村上春樹訳 (2006) 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』白水社。  
スコット・フィッツジェラルド、村上春樹訳 (2006) 『グレート・ギャツビー』中央公論社。  
トルーマン・カポーティ、村上春樹訳 (2008) 『ティファニーで朝食を』新潮社。

(さいとう りか・ウェスタン・ミシガン大学教授)